

上野原市埋蔵文化財調査報告書 第3集

大間々遺跡Ⅱ

(仮称) 上野原整形外科新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

上野原市教育委員会

上野原市埋蔵文化財調査報告書 第3集

大間々遺跡Ⅱ

(仮称) 上野原整形外科新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

上野原市教育委員会

序

本書は、平成 19 年、(仮称) 上野原整形外科の新築工事に伴って実施した大間々遺跡の発掘調査報告書です。

今回の調査は、埋蔵文化財を記録保存し後世に永く伝えることを目的に実施したもので、大間々遺跡の調査としては平成 13 年度の新庁舎建設以来 2 度目となります。

調査の結果、奈良時代から平安時代の建物跡や、土器、鉄製の矢じりなどが発見され、これまで不明確だった当時の土地利用等を考えるうえで重要な成果を得ることができました。この成果が、地域の歴史解明や郷土学習に活用されることを期待しています。

最後に、これまでの調査にあたってご協力いただいた梶谷光太郎氏、並びに関係各位、及びご指導いただいた山梨県教育委員会学術文化財課を始めとする関係機関に厚くお礼を申し上げます。

平成 19 年 8 月

上野原市教育委員会

教育長 綱野清治

例 言

1. 本書は、山梨県上野原市上野原地内で実施された大間々遺跡の第Ⅱ次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(仮称) 上野原整形外科新築工事に伴う事前調査として平成18年度に実施された。なお、大間々遺跡の発掘調査は平成13年度に新庁舎等建設工事に伴って実施されていることから、今回の調査を第Ⅱ次調査として扱う。
3. 発掘調査は上野原市教育委員会が実施した。調査組織はつぎのとおりである。
事務局 網野清治(教育長)、小笠原徳喜(社会教育課長)、尾形 篤(社会教育担当リーダー)
担当者 小西直樹(社会教育担当)、早勢加菜(文化財主事)
参加者 加藤文宣、富田 審、小俣和男、山口俊夫、古根村典子、富岡ます美
4. 本書の執筆・編集は小西直樹、早勢加菜が行った。執筆分担は第I・II・IV章を小西、第III章及び図版・遺物観察表を早勢が担当した。
5. 本書にかかる出上品・記録図面等は、一括して上野原市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書に転載した地図はつぎのとおり。
遺跡位置図：昭和56年国土地理院の承認を受けて調整した5千分の1地形図
周辺の遺跡分布図：国土地理院発行の2万5千分の1地形図
2. 遺構・遺物図版
(1) 遺構の縮尺は1/60を基本とし、図版スケールに明記した。
(2) 遺構断面図中のポイント部分に記載した数値は標高を示す。
(3) 遺物の縮尺は1/3を基本とし、図版スケールに明記した。
3. 表
(1) 表中の計測数値は残存値を示す。
(2) 色調の判別には「新版標準土色帖」(日本色彩研究所色票監修 1988)を利用した。
4. 遺構番号は整理作業の過程で変更している。
5. 石材の判別は早勢が行い、中井均氏(都留文科大学)による野田尻I遺跡出土資料の石材鑑定結果(1998)を参考とした。

上野原町教育委員会 1998『野田尻I遺跡』(『上野原町埋蔵文化財調査報告書』第7集)

目 次

序 例言 凡例

第I章 遺跡の位置と周辺の環境 ······	1
第II章 調査の経緯 ······	3
第1節 調査にいたる経緯と経過 ······	3
第2節 調査の方法 ······	4
第3節 遺跡の層序 ······	4
第III章 発見された遺構と遺物 ······	5
第1節 掘立柱建物址 ······	5
第2節 ピット ······	6
第3節 土坑 ······	6
第4節 集石 ······	9
第5節 遺構外出土遺物 ······	9
第IV章 まとめ ······	10

挿図目次

第1図 遺跡位置図 ······	1
第2図 周辺の遺跡分布図 ······	2
第3図 調査区配図 ······	11
第4図 調査区全体図 ······	12
第5図 1号掘立柱建物址 ······	13
第6図 2号、3号掘立柱建物址 ······	14
第7図 土坑-1 ······	15
第8図 土坑-2 ······	16
第9図 集石 ······	17
第10図 遺構出土遺物 ······	18
第11図 遺構外出土遺物 ······	19

表目次

第1表 出土遺物観察表 ······	20
第2表 集石観察表 ······	21

写真目次

写真1 遺跡遠景、調査風景	
写真2 調査区近景、遺構検出状況（南東部）	
写真3 掘立柱建物址	
写真4 集石、出土遺物	

第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境

上野原市は山梨県東端の県境に位置し、東京都檜原村や神奈川県相模原市藤野町と接している。周辺は丹沢山地や丹沢山塊が広がる山間地であり、市内を流れる桂川（相模川）や支流の鶴川・秋山川の沿岸に狭小な河岸段丘が点在する。市域は県境という地理的要因から古来より関東地方との関係が強く、近世には江戸・甲府・信州を結ぶ甲州街道の宿場が4宿置かれ、桂川の水運とともに東西交通の要衝地として栄えた。

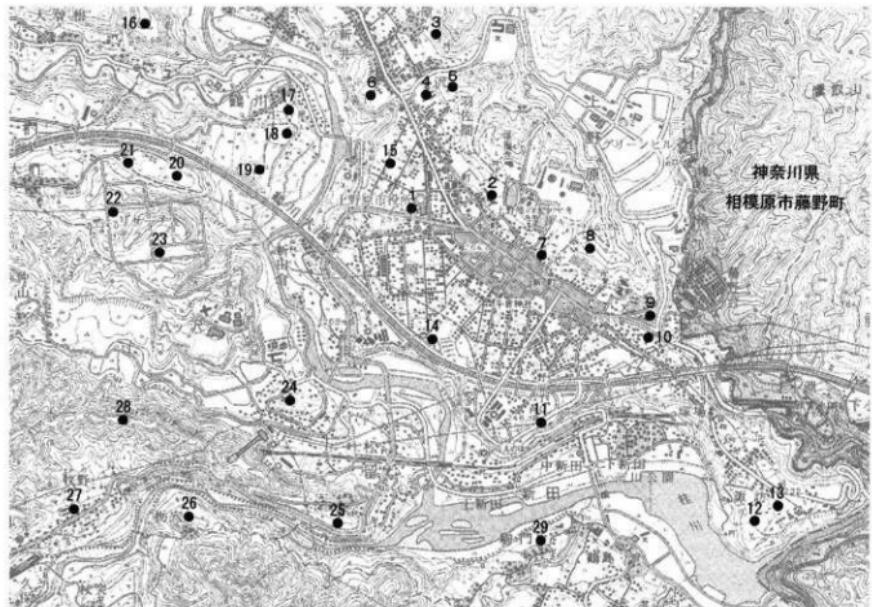
大間々遺跡は桂川と鶴川の合流地点に発達した市内最大の河岸段丘面にある。平成13年、新庁舎（現在の上野原市役所）建設工事に伴う発掘調査で、奈良・平安時代の集落址が検出されている。今回の調査地は市役所北側に位置し、木造平屋の集合住宅があった場所である。周辺は国道20号（甲州街道）と県道上野原あきる野線に挟まれた市街地の一角で、段丘背後に丘陵が張り出し、調査地から北側にかけて平坦地が次第に狭くなっている。調査地点の標高は約267mである。

上野原市教育委員会 2007『大間々遺跡』（『上野原市埋蔵文化財調査報告書』第2集）



第1図 遺跡位置図 (1/5000)

大間々遺跡の周辺では、河岸段丘面から背後の丘陵斜面部にかけて遺跡が点在する。縄文時代の遺跡としては、上野原小学校遺跡（2）で縄文時代中期～後期の遺物包含層、大堀II遺跡（5）で縄文時代中期の堅穴住居址2軒、寺畠遺跡（15）で縄文時代中期の遺物集中部が発掘調査されている。弥生時代の遺跡は未確認だが、古墳時代以降では上野原小学校遺跡（2）で古墳後期～奈良時代の堅穴住居址3軒、大堀I遺跡（4）で平安時代の堅穴住居址2軒が発掘調査され、新井遺跡（6）でも平安時代と思われる堅穴住居址やピットが確認されている。大間々遺跡（1）は奈良・平安時代を主体とした集落址である。平成13年度の発掘調査で堅穴住居址や掘立柱建物址などが複数検出され、遺跡が周辺に広がる可能性が指摘されていた。



- 1 大間々 縄文、古墳、奈良、平安 2 上野原小学校 縄文（早・中・後）、古墳、奈良、平安 3 西シ原 縄文（早・前）
 4 大堀I 縄文（中）、平安 5 大堀II 縄文（早・中）、古墳、平安 6 新井 縄文（早・中）、平安 7 新街 縄文（中）
 8 根木山 縄文（中・後）、平安 9 横ヶ丘 縄文、古墳、平安 10 塚場古墳群 古墳 11 関山 縄文（早・中）、平安
 12 狐原I 縄文（早～後）、弥生、古墳、奈良、平安 13 狐原II 縄文（早～後）、弥生、古墳、奈良、平安 14 内城館址 中世
 15 寺畠 縄文（牛） 16 大曾根 縄文（前・中） 17 上野山I 縄文（後） 18 上野山古墳 古墳 19 上野山II 縄文（中・後）、弥生
 20 大浜 縄文（早・中・後）、平安 21 南大浜 縄文（中）、弥生 22 大門I 縄文（早・中・後）、平安 23 大門II 縄文（早・中）、平安
 24 ハッ沢 縄文（中） 25 松留 縄文（後） 26 坂穴 縄文（中） 27 牧野 縄文、平安 28 牧野跡 中世 29 駒門 縄文（中）、弥生

第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25000)

第Ⅱ章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯と経過

平成18年5月、(仮称)上野原駅前外科新築工事の事業主より上野原市教育委員会に対し、工事に關わる埋蔵文化財の有無及び取扱いに関する事前相談があった。工事予定地は山梨県上野原市上野原3785番地で、計画では既存の木造平屋の集合住宅を取り壊し、跡地に駐車場を備えた診療所1棟を建設するものであった。工事予定地は遺跡の該当地ではなかったが、近隣の大間々遺跡で奈良・平安時代の集落址が平成13年に発掘調査されていた。このため、上野原市教育委員会は事業主と遺跡調査が必要である旨の事前相談書を取り交わし、現場の住宅が撤去され更地になった段階で試掘調査を行い遺跡の有無を把握することとした。

同年11月、事業主より現場の立入りが可能になった旨の連絡を受け、12月6・7日に試掘調査を実施した。この結果、試掘溝4ヶ所のうち3ヶ所で奈良へ平安時代に推定されるピットや土坑及び多数の土器片(縄文・上師器・須恵器)が検出され、大間々遺跡の範囲が工事予定地まで広がっていることが確認された。その後に山梨県教育委員会や事業主と発掘調査の範囲・期間・予算等について協議を重ねた結果、駐車場予定地を盛土保存とし、建物の基礎によって遺跡が破壊される部分を発掘調査することとした。この頃、上野原市教育委員会で文化財業務を主管する社会教育課は、通常の業務に加え、国指定天然記念物「上野原の大ケヤキ」樹勢回復事業と県史跡「恋塚一里塚」崩落に伴う緊急復旧工事が重なったため発掘調査の日程調整に苦慮したが、建設工事が差し迫っていたため急に発掘調査を実施することとし、12月22日に事業主と上野原市教育委員会との間で協定書を締結した。この協議過程で建物予定地の試掘調査を新たに実施し、発掘調査の必要な範囲を絞り込んだ。

12月28日、事業主より文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出されたのを受け、翌年1月11日～24日に上野原市教育委員会が発掘調査を実施した。発掘調査面積は約100m²で、工事予定面積2,146m²の約4.6%に当たる。発掘調査の経過はつぎのとおりで、調査終了後に出土品等の整理作業を断続的に行い、同年7月までに報告書の編集作業を終了した。

発掘調査の経過

- 1月11日(木) 重機を使って表土を掘削し、地下約60cmの遺構確認面で多数のピットを確認する。
- 12日(金) プラン確認後、順次ピットの半裁作業を開始。
- 15日(月) ピット・土坑の検出。レベル基準杭を設定。
- 16日(火) ピット・土坑の検出。5mグリッドを設定。
- 17日(水) 午前中、雨のため室内で出土品の水洗い。午後、ピット・土坑の検出。
- 18日(木) ピット・土坑の検出。
- 19日(金) ピット・土坑の検出。遺構全体図を作成。
- 22日(月) ピット・土坑の検出。遺構全体図を作成。
- 23日(火) 集石の検出。孤立柱建物址エレベーション図作成。
- 24日(水) 集石の石すべてを取り上げ、観察表を作成。調査区全景及び遺構の完掘写真を撮影し、現地調査を終了する。
- 26日(金) 埋め戻しを行い、すべての作業を完了する。事業主宛に現地調査の完了及び慎重工事を通知。

第2節 調査の方法

発掘調査は工事予定区域 2,146 m²のうち約 100 m²で実施した。グリットは磁北を基準に 5mごとに設定し、基準点を調査区東側の境界紙とした。表十（旧集合住宅の整地層及び旧表土）は重機で掘削した。第II層は遺物包含層であるが、時間的な制約のため重機で慎重に掘削しながら遺物の発見に努めた。遺構の確認は基本的に第III層上面で行い、工事の掘削が及ぼない第III層以下の掘り下げは行っていない。遺構の大半は当初ピットとして扱い発見順に番号を付けたが、後の整理段階で遺構名を内検討した結果、ピット・土坑に再分類したうえで北西側から番号を付け直した。また、本書ではピットのうち建物配置が認められたものを掘立柱建物址として報告している。遺物の取り上げは遺構ごとに一括して行い、遺構外は層序ごとに行った。

第3節 遺跡の層序

調査地はほぼ平坦な地形である。基本層序は大間々遺跡の第I次調査（2007）結果と概ね一致する。

第I-1層 暗褐色土

旧集合住宅の整地層で、砂利等を土体とする。層厚は約 15 cm。

第I-2層 暗褐色土

IH表上で、締まり弱い。層厚は約 30 cm。

第II層 暗褐色土（黒色味が強い）

締まり弱い。橙色・黒色スコリア（径 5 mm 以下）をやや多く含む。上師器の破片をやや多く含み、古代の遺構覆土は本層を基調とする。層厚は約 20 cm。

第III層 暗褐色土（褐色味が強い）

締まりやや強い。細粒（径 3 mm 以下）の橙色スコリアをやや多く含み、大粒（径 1 cm 大）の橙色・黒色スコリアを若干含む。褐色土が斑状に、白色粘土塊（2 cm ~ 3 cm 大）がまばらに混在する。下層との境は漸移的である。本層上面が古代の遺構確認面であり、この部分で縄文土器の破片が検出された。層厚は約 65 cm。

第IV層 橙色土

締まり強い。ローム層に相当する。

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

発見された遺構は、奈良・平安時代の掘立柱建物址3棟、ピット24基、土坑15基、奈良・平安時代以降の集石1基である。遺構確認面は第Ⅲ層上面である。遺物は遺構の内外から出土し、土師器・須恵器・金属製品(鉄鏃)がある。土器はすべて小片である。この他に縄文時代中期中葉から後期の土器や石器が出土したが、遺構は未確認である。なお、本稿における上部器の年代観は『甲斐型土器—その編年と年代—』山梨県考古学協会1992に拠った。また、縄文土器の分類に当たっては、山梨県史における縄文土器編年(小野・今福・三田村1999、今福2003)を参照した。

小野正文・今福利恵・三田村美彦 1999「縄文時代の編年」『山梨県史 資料編2 原始・古代』

今福利恵 2003「(研究メモ) 山梨県における勝坂式土器後半期の素描」『研究紀要19』 山梨県埋蔵文化財センター

第1節 掘立柱建物址

現場調査の段階で掘立柱建物址3棟が重複して確認されたが、調査区南東端でも同様の柱穴が検出されていることから、調査区外にも分布することが推定できる。すべて未調査区にかかるため正確な規模等は不明確だが、平面は2間×3間の正方形を呈する側柱式で、規模は4.3m～4.8m程度と推定される。軸方位はほぼ一致する。遺構の詳細な時期は不明だが、確認面や出土遺物等から奈良・平安時代に位置付けられる。

1号掘立柱建物址(第5図、写真3)

位置 調査区中央のC-3、D-3区に位置し、東側は未調査区にかかる。北側は2号掘立柱建物址と重複するが、新旧関係は不明である。

形状・規模 2間×3間の側柱式建物と推定され、規模は4.8m四方である。主軸方位はN--25°—W。柱間は、北側と南側は2.4m、西側は1.7mで中央間は1.4mと狭くなっている。柱穴の平面は方形で、長軸55cm～85cm、深さは60cm～70cmである。北西隅のピット(P33)は2号掘立柱建物址のピットと重複する。

覆土 柱痕跡は認められなかった。南側中央のピット(P37)では覆土中層に焼土層が認められた。

遺物 すべての柱穴から土器の細片が出土した(第10図1～9)。内訳は土師器39点、須恵器壺1点、陶器1点、縄文土器3点である。土師器は内外面をナデ調整した相模型の壺や、内外面に暗文が施された壺が口立ち、甲斐型の壺はわずかである。土師器壺片がP34とP35の間に接合した。

時期 土師器壺は甲斐型土器編年のVI期に相当することから、遺構の年代を8世紀後半に推定しておきたい。

2号掘立柱建物址(第6図、写真3)

位置 調査区北西側のC-2、D-2・3区に位置し、北隅は未調査区にかかる。南側に1号、北側に3号の各掘立柱建物址と重複するが、新旧関係は不明である。

形状・規模 2間×3間の側柱式建物で、規模は約4.3m四方と推定される。主軸方位はN--25°—W。柱間は、北側と南側は約2.2m、西側は北から2.2m、1.0m、1.1mを測る。柱穴の平面は円形・不整橢円形・方形で、長軸25cm～55cm、深さは30cm～50cmである。北側のピット(P13・P21)は

3号掘立柱建物址、南側のピット（P 33）は1号掘立柱建物址のピットと重複する。

覆土 柱痕跡は認められなかった。

遺物 柱穴から土器の細片が出土した（第10図10）。内訳は土師器20点、須恵器2点、縄文土器1点で、このうち土師器は相模型や甲斐型の壺が大半である。土師器壺の破片（P 26 覆土最下層）が、隣接する9号土坑と接合した。

時期 位置関係や形状・規模等から、他の掘立柱建物址と近い時期に想定される。

3号掘立柱建物址（第6図、写真3）

位置 調査区北西側のD—2区に位置し、北側と東側は未調査区にかかる。南半分は2号掘立柱建物址と重複するが、新旧関係は不明である。

形状・規模 2間×3間の側柱式建物で、規模は約4.5m四方と推定される。主軸方位はN—30°—W。柱間は、北側と南側は約2.0m、西側は1.7mで中央間は1.3mと狭くなっている。柱穴の平面は不整橢円形・方形で、長軸60cm～85cm、深さは50cm～70cmである。西側のピット（P 14・P 22）は2号掘立柱建物址のピットと重複する。

覆土 柱痕跡は認められなかった。南西端のピット（P 22）では覆土中層に焼土層が認められた。

遺物 柱穴から土器の細片が出土した（第10図11・12）。内訳は土師器25点、縄文土器1点で、このうち土師器は相模型の壺が大半である。

時期 位置関係や形状・規模等から、他の掘立柱建物址と近い時期に想定される。

第2節 ピット

ピットは総数48基を確認したが、このうち掘立柱建物址に分類したものを除く24基を本節で報告する。

ピットは概ね大小2種類に分類できる。小型ピットは広範囲に分布し、掘立柱建物址の範囲と重なるものもある。平面は円形・不整方形を呈し、長軸20cm～40cmを中心に最大45cm、深さは10cm～30cmを中心に最深45cmを測る。切り合ひ関係は、P 42が14号土坑、P 46が9号土坑と重複するが新旧関係は不明。

大型ピットは調査区南東端で3基検出された（P 43～P 45）。平面は円形・不整方形を呈し、長軸は確認されただけで65cm～70cm、深さは37cm～63cmを測る。規模や形態から掘立柱建物址の一部と見られる。

出土遺物は覆土中から土師器・須恵器・縄文土器の細片がわずかに出土している（第10図13～15）。

覆土はいずれも掘立柱建物址や土坑と同様に第II層を基調としている。

遺構の詳細な時期は不明だが、確認面や出土遺物、覆土の状況から奈良・平安時代に位置付けられる。

第3節 土坑

15基を確認した。分布は調査区の南東側に偏り、掘立柱建物址の範囲と重なるものもある。平面は円形を基調としたものが多く、他に隅丸方形、楕円形、不整形がある。出土遺物は覆土中から土師器・須恵器・縄文土器の細片が出土した。覆土はいずれも掘立柱建物址やピットと同様に第II層を基調としている。遺構の詳細な時期は不明だが、確認面や出土遺物、覆土の状況から奈良・平安時代に推定される。

1号土坑（第7図）

位置 D-2区。

形状・規模 平面円形。長軸95cm・短軸75cm、深さ20cm。

覆土 暗褐色土の単層、焼土粒・炭粒を少量含む。

遺物 凝灰質砂岩製の礫が1点(483g)、土坑の中央底面より出土した。

2号土坑（第7図）

位置 B-2、3区。

形状・規模 平面円形で、3号土坑と重複している。径125cm・深さ25cm。

覆土 暗褐色土の単層。

遺物 士師器6点。

3号土坑（第7図）

位置 B-3区。

形状・規模 平面円形で、2号土坑と重複している。径120cm・深さ20cm。

覆土 暗褐色土の単層。

遺物 士師器11点・須恵器1点(第10図16)。

4号土坑（第7図）

位置 B-3、4区。

形状・規模 南東側が未調査区にあたる。全体形状は不明だが、平面は不整形を呈し、長軸100cm・短軸75cm。底面は凹凸があり、木の根による搅乱の可能性もある。

覆土 暗褐色土が主体。

遺物 繩文土器1点。

5号土坑（第7図）

位置 C-3区。

形状・規模 北西側が未調査区にあたる。全体形状は不明だが、平面は円形を呈していたと推定される。長軸70cm・短軸20cm、深さ30cm。

覆土 暗褐色土の単層。

遺物 なし。

6号土坑（第7図）

位置 C-3区。

形状・規模 北西側が未調査区にあたる。全体の形状は不明だが、平面は円形を呈していたと推定される。長軸95cm・短軸25cm、深さ25cm。

覆土 暗褐色土の単層。

遺物 須恵器1点。

7号土坑（第7図）

- 位置 C-3 区。
- 形状・規模 北西側が未調査区にあたる。全体の形状は不明だが、平面は橢円形を呈していたと推定される。長軸 105 cm・短軸 20 cm、深さ 25 cm。
- 覆土 暗褐色土の単層。
- 遺物 土師器 3 点・須恵器 1 点（第 10 図 17・18）・縄文土器 1 点。

8号土坑（第7図）

- 位置 C-3、4 区。
- 形状・規模 平面円形。北側が P 37 と重複するが、新旧関係は不明。径 100 cm、深さ 40 cm。
- 覆土 暗褐色土が主体で、炭粒を少量含む。
- 遺物 土師器 12 点（第 10 図 19）・縄文土器 4 点。

9号土坑（第7図）

- 位置 D-3 区。
- 形状・規模 平面隅丸方形。東側が P 46 と重複するが、新旧関係は不明。長軸 125 cm・短軸 95 cm、深さ 40 cm。
- 覆土 暗褐色土が主体で、炭粒を少量含む。
- 遺物 土師器 19 点（第 10 図 20～22）・須恵器 1 点。

10号土坑（第8図）

- 位置 D-4 区。
- 形状・規模 南西側が未調査区にあたる。全体の形状は不明だが、平面はほぼ円形を呈していたと推定される。長軸 105 cm・短軸 90 cm、深さ 35 cm。
- 覆土 暗褐色土が主体で、壁際に褐色土が堆積する。
- 遺物 土師器 5 点。

11号土坑（第8図）

- 位置 C-4 区。
- 形状・規模 平面円形。径 120 cm、深さ 30 cm。
- 覆土 暗褐色土の単層で、焼土粒・炭粒を少量含む。
- 遺物 土師器 7 点・縄文土器 1 点（第 10 図 23）。

12号土坑（第8図）

- 位置 C-4 区。
- 形状・規模 平面隅丸方形。長軸 130 cm・短軸 105 cm、深さ 25 cm。
- 覆土 暗褐色土の単層で、焼土粒・炭粒を少量含む。
- 遺物 土師器 10 点・須恵器 1 点（第 10 図 24）。

13号土坑（第8図）

位置 B-4、C-4区。

形状・規模 平面はほぼ円形。径 85 cm・深さ 30 cm。

覆土 暗褐色土が主体で、上層と下層に褐色土が見られる。

遺物 土師器 4点・須恵器 1点（第10図 25）。

14号土坑（第8図）

位置 C-4区。

形状・規模 平面隅丸方形。13号土坑と P-42 が重複するが、新旧関係は不明。長軸 80 cm・短軸 55 cm、深さ 10 cm。

覆土 暗褐色土の单層。

遺物 土師器 2点。

第4節 集石

集石 1基が B-3区の試掘溝で検出された（第9図・写真4）。礫は拳大から人頭大で、試掘溝に沿って 3m の範囲に集中していた。周囲が未調査のため規模等は不明だが、南側 2m の調査区域で拳大の礫が集中していることから、この部分まで集石の範囲が及ぶ可能性がある。平面では不鮮明だったが、試掘溝の断面調査から浅い掘り込みが確認され、礫はこの内部にまとまっていたことが分かった。掘り込みの規模は試掘溝に沿って 3.6m、深さ 30 cm である。底面はほぼ平坦で、横は緩やかに立ち上がる。

出土遺物は、礫中に混じて須恵器片 1点（第10図 26）・陶器片 1点が出土した。この他に縄文時代の土器細片や石器（石皿・打製石斧の欠損品）が若干数出土したが、これらは周囲から混入したものと思われる。覆土は暗褐色土の单層で基本上層第II層を基調とする。覆土中で炭化材（長さ約 5 cm）1点が検出されたが、集石内で火を焚いたような痕跡は認められなかった。礫は大半が自然礫で、ごく一部に吸炭や赤化等の被熱痕が認められた。礫の観察表を別表に示した。

遺構の時期は不明確だが、確認層位や覆土等から奈良・平安時代以降に推定される。遺構の性格は不明。

第5節 遺構外出土遺物

遺構外で縄文土器 56点、土師器 100点、焼成粘土塊 1点、陶器 1点、鐵鏃 1点が出土した。基本土層の第II・第III層より多く出土した。土器はすべて破片で、復元可能な資料はない。縄文土器（第11図 27～50）は縄文時代中期中葉～後期に属すが、中期中葉の新道式・藤内式期が主体を占める。土師器（第11図 51～56）は内外面をナデ調整した相模型や、内面に暗文が施された甲斐型坏が主体を占め、甲斐型坏は甲斐型上器編年VII～VIII期に相当するものが目立つ。焼成粘土塊（第11図 57）は、片側が指で押し潰されたように圧んでいる。鐵鏃（第11図 58）は D-2区第III層上面をジョレンで精査中に出土し、2号及び3号掘立柱建物址の範囲に位置する。鉛で覆われ正確な形状は不明確だが、鏃身は五角形を呈する。

第Ⅳ章 まとめ

第1節 奈良・平安時代

今回の調査では奈良・平安時代の掘立柱建物址・ピット・上坑が検出され、狭い調査区にかかわらず遺構の密集度は高かった。とくに掘立柱建物3棟は重複し、調査区外にも分布する可能性がある。

掘立柱建物については正確な規模や構造及び帰属時期が不明確という問題が残るが、建物構造は2間×3間の側柱式の可能性が強く、西側の柱間が中央で狹まる特徴や、建物の軸方位がほぼ同一であるなどの共通点が認められる。帰属時期は遺構内外の出土遺物から奈良～平安時代前期に想定される。この時期の遺構は、南側の第1次調査で堅穴住居4軒・掘立柱建物1棟が検出されており、銅製の鉢貝具や仏教関連遺物（仏鉢状の土器、小型短頸壺）・転用硯など特異な遺物が出土している。のことから、付近一帯に奈良～平安時代前期の集落が定着し、一般集落と異なる機能を備えていた可能性がある。また、調査地点によって堅穴住居と掘立柱建物の比率が異なることから、集落構成に違いがあった可能性も考えられる。集落の存続期間については周辺の調査事例が蓄積されることによって解明できるものと思われるが、付近では7世紀代の堅穴住居を最古として8世紀前半代の堅穴住居が検出されており、集落の出現時期を考えるうえで注目される。

土器は遺構内外から小破片で出土した。上師器坏・甕が多く、須恵器は微少であった。土師器坏は内外面あるいは内面に暗文が施された甲斐型坏が多く、甲斐型上器編年VI期を最古にVII期～VIII期を主体とする。年代的には8世紀後半～9世紀前半に位置付けられる。一方、甕は内外面をナデ調整した相模型が大半を占めた。このように、坏は甲斐型、甕は相模型と器種によって型式が異なる傾向は、第1次調査の七器編年第3期（9世紀前半）にも認められ、奈良時代から平安時代にかけて相模型から甲斐型へ土器の転換が図られる過程を示しているものと言える。

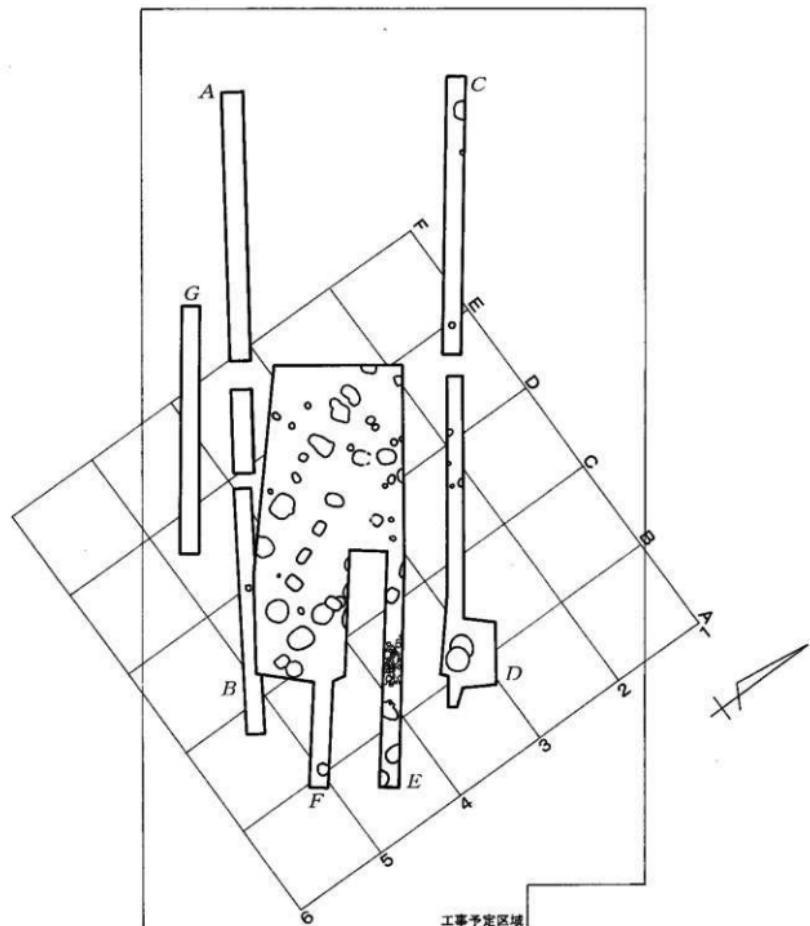
大間々遺跡の所在する市街地一帯は古代中斐国都留郡古郡郷の比定地とされるとともに、都留郡衙の移転に伴った初期郡衙が所在した地域とも考えられている。のことから、大間々遺跡や近隣における古代集落の実態把握を進めることで、桂川流域における郡郷制の解明に寄与できるものと期待される。

上野原町教育委員会 2003『上野原小学校遺跡II』(『上野原町埋蔵文化財調査報告書』第10集)

第2節 繩文時代

縄文時代は遺物のみの検出で、地下遺構の存否については保存を前提としたため確認までに至らなかった。土器は縄文時代中期中葉を主体として全て小さな破片だったが、試掘段階を含めて調査区全体から出土していることを考えれば、遺構が存在する可能性は否定できない。また、該期の遺跡は段丘背後の丘陵斜面地で多く確認されている他、今回調査地点の西側に位置する寺畠遺跡で小規模な遺物集中部が発掘調査されており、今回の調査結果はこれまで希薄だった河岸段丘面の遺跡分布に参考を迫るものと言える。

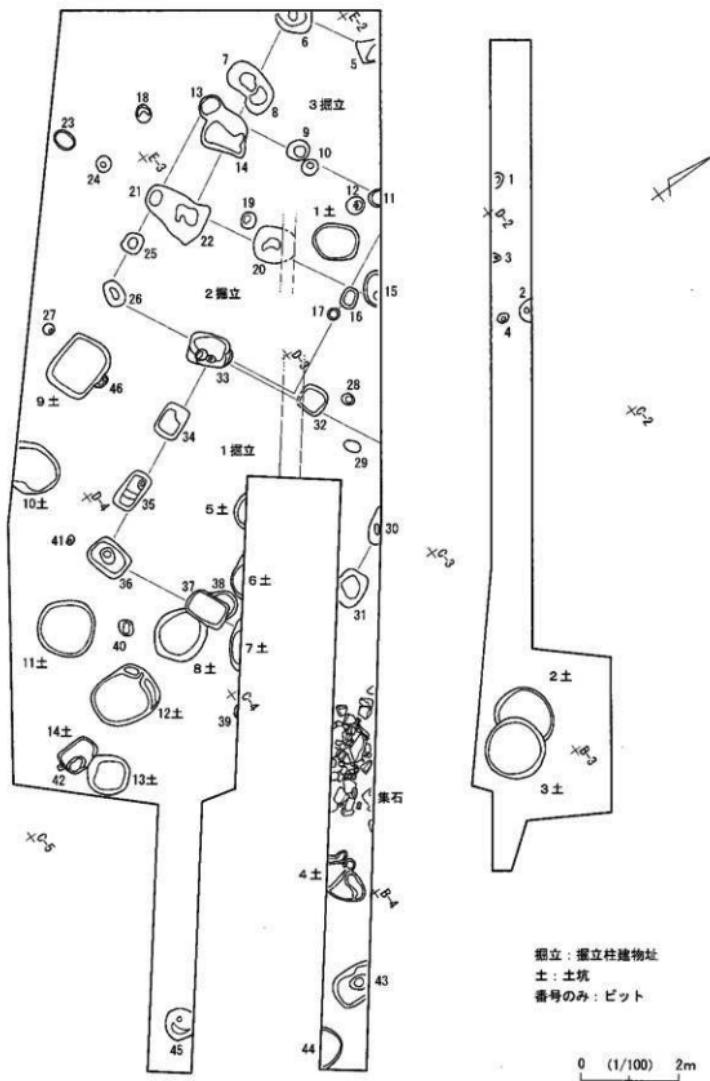
上野原市教育委員会 2006『山梨県上野原市内遺跡発掘調査報告書』(『上野原市埋蔵文化財調査報告書』第1集)



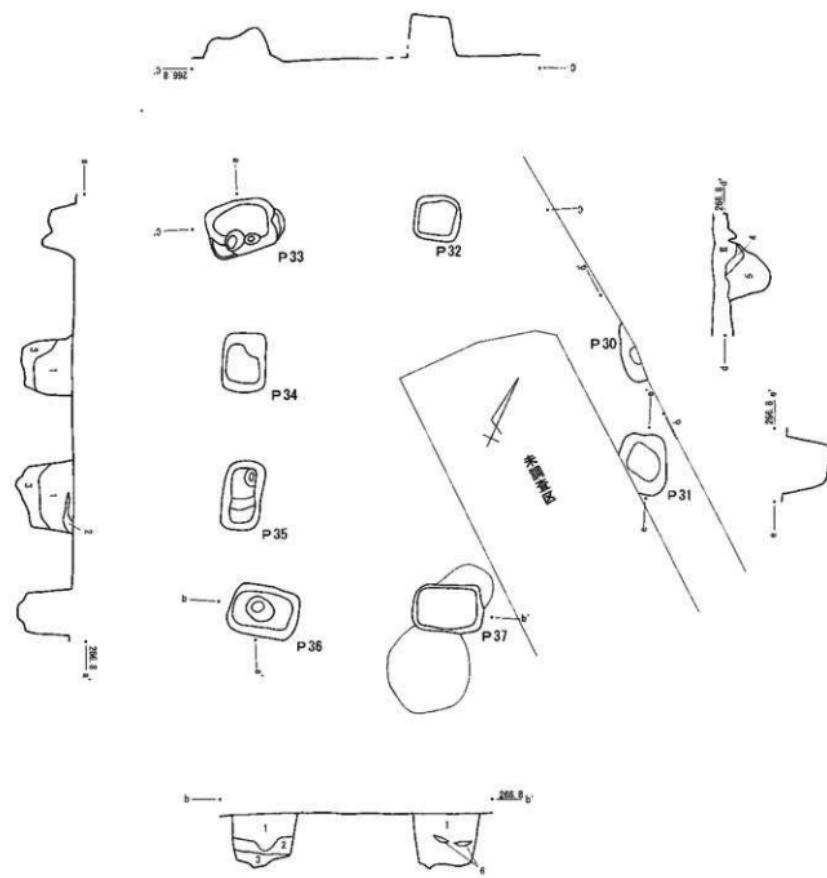
A~G : トレンチ (試掘溝)

0 (1/250) 10m

第3図 調査区配置図



第4図 調査区全体図

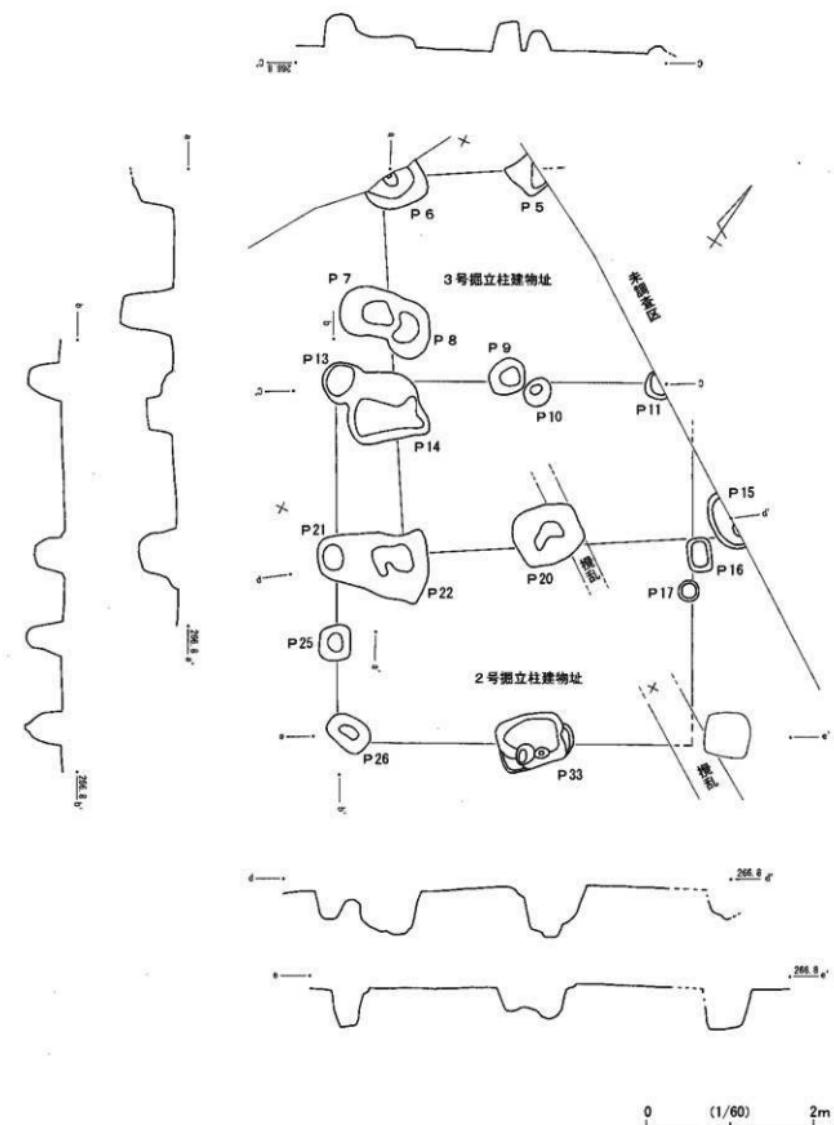


1号掘立柱建物址

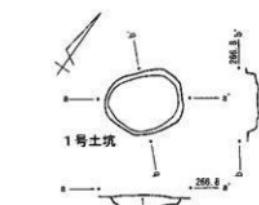
- 1 暗褐色土 粘性強く、締まり弱い。黒色・褐色スコリア多い。炭粒少量。
- 2 暗褐色土 粘性強く、締まり弱い。褐色上部多い。
- 3 暗褐色土 粘性強く、締まり弱い。
- 4 暗褐色土 粘性強く、締まり弱い。スコリア少い。
- 5 暗褐色土 粘性、締まりやや強い。
- 6 無上

0 (1/60) 2m

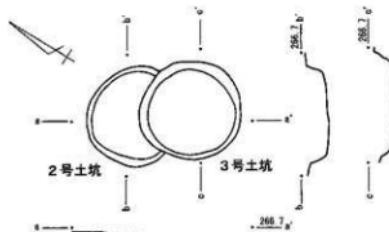
第5図 1号掘立柱建物址



第6図 2号、3号据立柱建物址



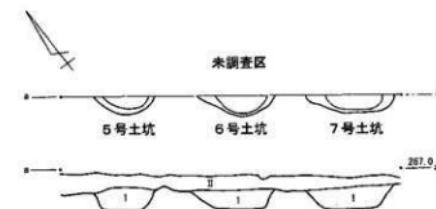
1号土坑
1 暗褐色土 粘性やや強く、縮まり強い。黒色スコリア多い。焼上粒・炭粒を少量含む。



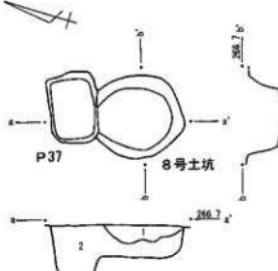
2号土坑
1 暗褐色土 基本層序第Ⅱ層を基調とする。
3号土坑
1 暗褐色土 基本層序第Ⅱ層を基調とする。
3号土坑第1層に比べ、縮まり弱い。



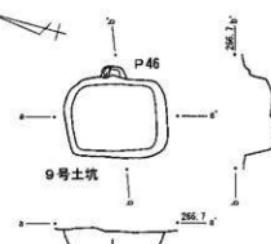
未調査区



未調査区
5号土坑
1 暗褐色土 粘性弱く、縮よりやや強い。黒色スコリア多い。橙色スコリア・焼上粒少量。
6号土坑
1 暗褐色土 基本層序第Ⅱ層を基調とする。
7号土坑
1 暗褐色土 基本層序第Ⅱ層を基調とする。



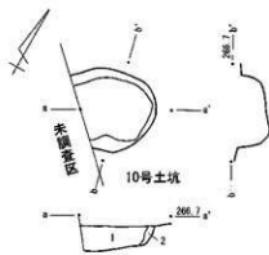
8号土坑
1 暗褐色土 黒色スコリア多い。炭粒少々。
第2層と類似するが、褐色味
が強い。
2 暗褐色土 黒色スコリア多い。炭粒少々。



9号土坑
1 暗褐色土 粘性弱く、縮まりやや弱い。橙色・黒色スコリア多い。炭粒少々。
2 暗褐色土 粘性弱く、縮まり強い。橙色・
黒色スコリア多い。炭粒少々。

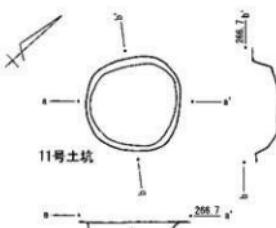
第7図 土坑—1—

0 (1/60) 2m



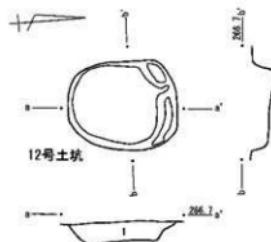
10号土坑

- 1 紫褐色土 粘性強く、縮まりない。黑色スコリア多い。橙色スコリア・炭粒少々。
- 2 楊色上 粘性やや強く、縮まりやや強い。黑色スコリアやや多い。



11号土坑

- 1 喙褐色土 粘性やや強く、縮まりやや強い。黑色スコリア多い。炭粒・塵土粒少々。



12号土坑

- 1 暗褐色土 粘性やや強く、縮まりやや強い。黑色スコリア多い。炭粒・塵土粒少々。



13号土坑

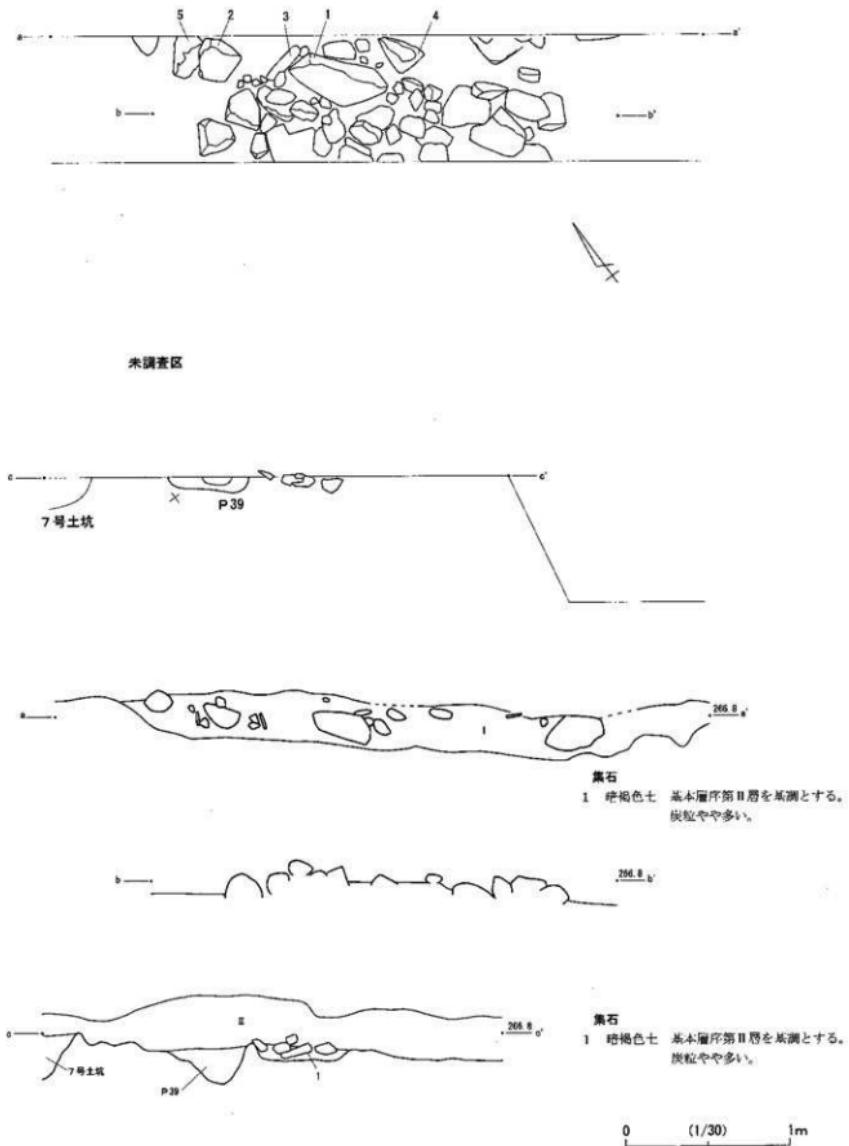
- 1 楊色土 粘性やや強く、縮まりやや強い。黑色スコリア多い。炭粒少々。
- 2 暗褐色上 粘性やや強く、縮まり弱い。黑色スコリアやや多い。炭粒少々。
- 3 楊色上 粘性やや強く、縮まりやや強い。黑色スコリア多い。炭粒少々。

14号土坑

- 1 喙褐色土 粘性弱く、縮まりやや弱い。橙色スコリア多い。白色粘土粒少々。

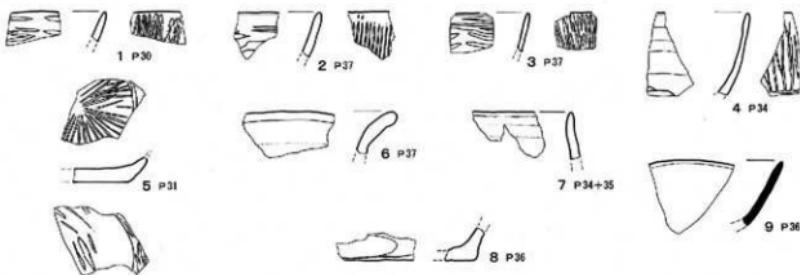
0 (1/60) 2m

第8図 土坑—2—

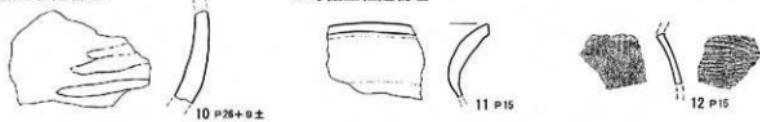


第9図 集石

1号掘立柱建物址



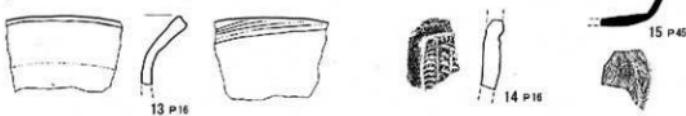
2号掘立柱建物址



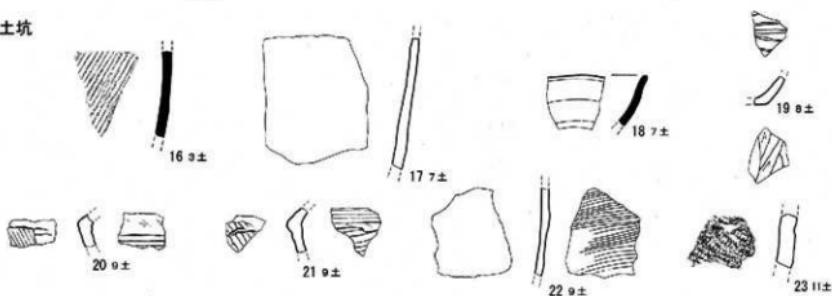
3号掘立柱建物址



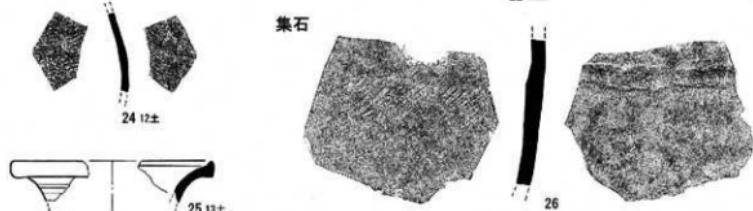
ピット



土坑

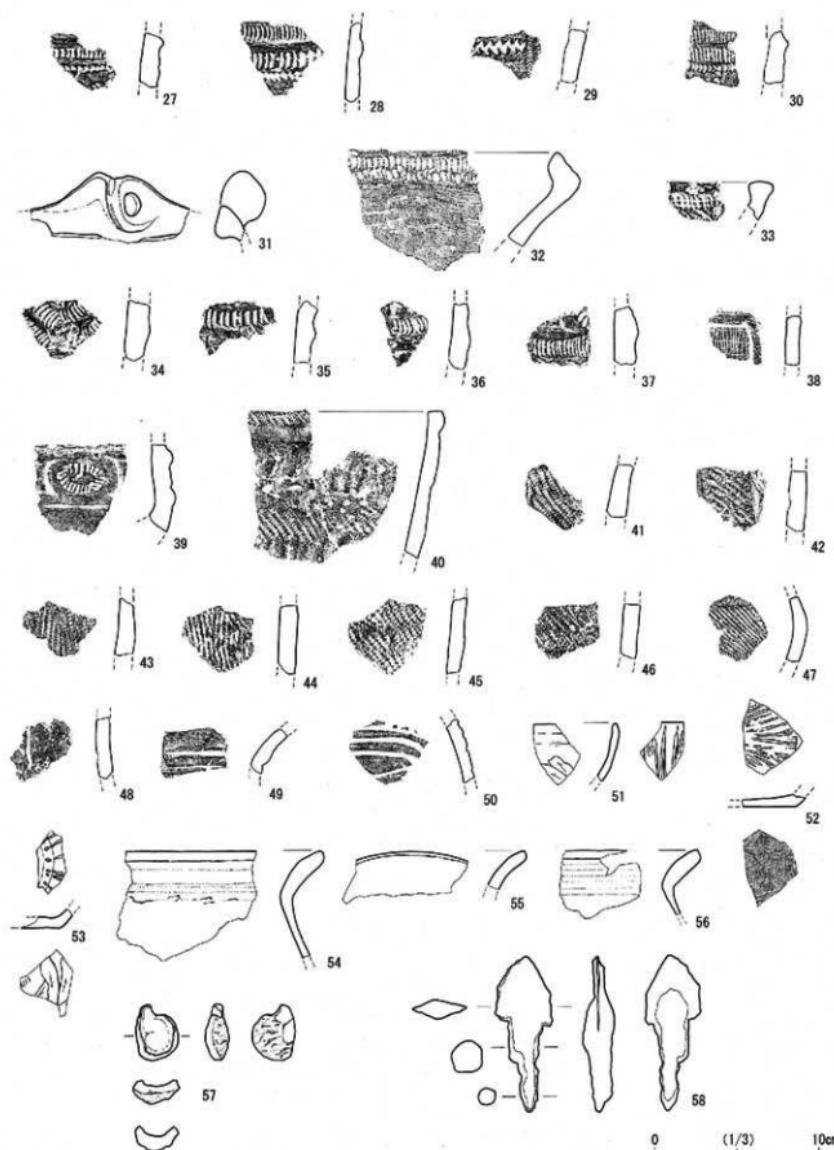


集石



0 (1/3) 10cm

第10図 遺構出土遺物



第11図 遺構外出土遺物

第1表 出土遺物觀察表

図	N.	出土位置	層位	測定	整理	保存状態	色調	胎土	記述・本文抜粋	備考
10	1	1号縦P P 30	層土	上部器	手	白表面	褐色	口・赤色粒子、金雲母、砂粒	外腹側ヘーミガラ、内面放射状模文。	
10	2	1分縦立 P 37	層土	土器器	手	上部器	褐色	赤色底子、口・金雲母	外腹側ヘーミガラ、内面放射状模文。	
10	3	1号縦立 P 37	層土	土器器	手	上部器	褐色	白色粒子、金雲母	外腹側小波状模文、内面放射状模文。	
10	4	1号縦立 P 34	層土	二輪器	手	上部器・底部	褐色	口・赤色粒子、口・金雲母	体部外瓦へク割り、内面放射状模文。	
10	5	1号縦立 P 36	層土	一輪器	手	体へ黄褐色	褐色	口・赤色粒子、口・金雲母	外腹側ヘーミガラ、内面放射状模文。	
10	6	1号縦立 P 37	層土	土器器	手	上部器	褐色	口・赤色粒子、口・金雲母、砂粒	外腹側ヘーミガラ、内面放射状模文。	
10	7	1号縦立 P 34～35	層土	土器器	手	上部器	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母、砂粒	口端擦ナメ	
10	8	1号縦立 P 36	層土	土器器	手	上部器	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母、砂粒	底部内外兩側ナメ	
10	9	1号縦立 P 36	層土	直輪器	手	上部器・底部	灰褐色	口・赤色粒子、石英、砂粒	ロクロナメ	
10	10	2号縦立 P 26～39	層土	十輪器	燒	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英、金雲母、砂粒	口輪便ナメ	
10	11	3号縦立 P 15	層土	十輪器	燒	口輪部	褐色	口・赤色粒子、黑・金雲母	ロ輪燒ナメ	
10	12	3号縦立 P 15	層土	上輪器	燒頭	外: 本輪部 内: 小輪部	褐色	口・赤色粒子、石英、金雲母	外面燒ヘケ、内面燒ヘケ。	
10	13	P 16	層土	土器器	寶	上部器	外: 灰褐色 内: 棕褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母、砂粒	ロ繩燒ナメ、燒ヘケ。	
10	14	P 16	層土	陶文土器	圓筒	頭部	深褐色	口・赤色粒子、石英、金雲母、砂粒	特殊に区画された内面と、深褐色文が見られる。	深褐色文
10	15	P 45	層土	深山器	手	底部	褐色	白色粒子、金雲母、砂粒	体部・底部外側ヘーミガラ。	
10	16	3号土坑 P 15	層土	板土器	燒	底部	褐色	白色粒子、砂粒	口端擦ナメ張一極擦。	
10	17	7号土坑	層土	直輪器	燒	外: 口・灰褐色 内: 棕褐色	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	外面燒ヘケ	
10	18	7号土坑	層土	強筋器	手	口端部	褐色	口・赤色粒子、石英、砂粒	ロクロナメ	
10	19	8号土坑	層土	土器器	長	側部～底部	褐色	口・赤色粒子、金雲母	体部外側部ヘーミガラ、底部ヘーミガラ、内面放射状模文。	
10	20	8号土坑	層土	土器器	手	上部器	褐色	白色粒子、石英、金雲母	外面燒ヘケ、内面燒ヘケ。	
10	21	8号土坑	層土	土器器	手	上部器	褐色	口・赤色粒子、石英、金雲母	外面燒ヘケ、内面燒ヘケ。	
10	22	8号土坑	層土	土器器	燒	底部	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母、砂粒	内面燒ヘケ	
10	23	11号土坑	層土	陶文土器	圓筒	底部	外: 褐灰褐色 内: 黑褐色	口・赤色粒子、石英、金雲母、砂粒	横位にBL溝文	縦文中筋
10	24	12号土坑	層土	直輪器	燒	底部	黃褐色	口・赤色粒子、石英、砂粒	外面焼き、内面同心円式の縦長。	外面白地
10	25	13号土坑	層土	強筋器	燒	口輪部	褐色	白色粒子、石英、砂粒	ロクロナメ	外面白地
10	26	黒ヘ	層土	直輪器	燒	頭部	褐色	口・赤色粒子、砂粒	外面叩き	内面に複合化
11	27	Aトレンチ	III段	陶文土器	深鉢	頭部	に赤い褐色	口・赤色粒子、石英、金雲母、砂粒	後壁に沿ったキャビティと三井押	歩道式窓
11	28	Dトレンチ	III段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	後門に沿ったキャビティと二角押	新道式窓
11	29	Dトレンチ	II～Ⅲ段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	パン生地式窓の後壁部に沿う三井押とキャビティ式の突起を有する三井押	新道式窓
11	30	Eトレンチ	II～Ⅲ段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	後壁に沿ったキャビティと二角押	新道式窓
11	31	Aトレンチ	II～Ⅲ段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	口周部に突き出る突起が並んでおり壁部が削られ、口部の外側に直線形凹溝が施されている。	壁面式窓
11	32	Aトレンチ	II～Ⅲ段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	ロクロナメ	
11	33	Aトレンチ	II～Ⅲ段	陶文土器	深鉢	口・底部	に赤い褐色	口・赤色粒子、砂粒	横位に複数の窓の跡が残されており、内側に窓枠が残されている。コロナメややくみを有する。	横行式窓
11	34	—	II段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	通窓式	窓内に窓
11	35	Cトレンチ	II段	陶文土器	深鉢	頭部	赤褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	通窓式	窓内に窓
11	36	—	II段	陶文土器	深鉢	頭部	に赤い褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	通窓式	窓内に窓
11	37	Aトレンチ	II～Ⅲ段	陶文土器	深鉢	頭部	に赤い褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母、砂粒	通窓式	窓内に窓
11	38	Dトレンチ	II～Ⅲ段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英	後壁により覆われた内面に、既下枝の葉の落葉がみられる。	壁内に窓
11	39	Aトレンチ	II～Ⅲ段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	右内凹溝文が遺され、下部は無文である。	壁内にアーチ式窓
11	40	Aトレンチ	II～Ⅲ段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、砂粒	横位の既窓	窓内に窓
11	41	Aトレンチ	II～Ⅲ段	陶文土器	深鉢	頭部	馬糞色	口・赤色粒子、砂粒	横位の既窓	窓内に窓
11	42	—	II段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英、砂粒	複数にこれら2つの既窓の中に、D既窓が複数に施されている。	窓内複数 既窓内複数
11	43	IV号	IV段	陶文土器	深鉢	頭部	に赤い褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	既位にBL溝文	窓内中筋
11	44	Dトレンチ	II～自層	陶文土器	深鉢	頭部	万字形褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	既位にBL溝文	窓内中筋
11	45	Rトレンチ	II～自層	陶文土器	深鉢	頭部	暗褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	既位にBL溝文	窓内中筋
11	46	Fトレンチ	II～自層	陶文土器	深鉢	頭部	シルバーカラー	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	既位・既位にBL溝文	窓内中筋
11	47	Bトレンチ	III段	陶文土器	深鉢	頭部	褐色	口・赤色粒子、石英、黑・金雲母	既位にBL溝文	窓内中筋

区	号	出土状況	層位	種別	剖面	遺存状況	色調	船上	調整・施文技法	備考
II	48	Fトレンチ	Ⅲ～Ⅳ層	銅文土器	深鉢	斜削	にぶい褐色	白・赤色粒子、石英、砂粒	縫合に痕跡	銅文後期
II	49	—	Ⅱ層	銅文土器	深鉢	斜削	にぶい黃褐色	白・赤色粒子、石英、黒・金雲母、砂粒	縫合に埋合	銅文後期
II	50	Gトレンチ	Ⅲ～Ⅳ層	銅文土器	深鉢	斜削	にぶい黄褐色	白・赤色粒子、石英、黒・金雲母、砂粒	縫合に痕跡が數多され、磨かれていく	銅文後期
II	51	—	Ⅲ層	土器基	坪	口縁部	褐色	白・赤色粒子、金雲母、砂粒	口縫合アーチ	内底装飾状等。
II	52	—	Ⅲ層	土器基	坪	底面	褐色	白・赤色粒子、金雲母、砂粒	底部内面アーチ	内底装飾状等。
II	53	Eトレンチ	Ⅲ～Ⅳ層	土器基	坪	体～底盤	褐色	白・赤色粒子、石英、金雲母、砂粒	体部内面アーチ	内底装飾状等。
II	54	Bトレンチ	Ⅲ～Ⅳ層	土器基	坪	口縫合～底盤	褐色	白・赤色粒子、石英、黒・金雲母、砂粒	口縫合アーチ	底部内面アーチ
II	55	Cトレンチ	II層	土器基	甕	口縫合部	内：褐色 外：暗褐色	白・赤色粒子、石英、黒・金雲母、砂粒	口縫合アーチ	内底装飾状等。
II	56	Cトレンチ	II層	土器基	甕	口縫合部	褐色	白・赤色粒子、石英、金雲母、砂粒	口縫合アーチ	内底装飾状等。
II	57	Gトレンチ	Ⅲ～Ⅳ層	既成土器	—	—	にぶい褐色	長径 33.2mm 幅径 20.3mm 厚さ 14.2mm 重さ 6.4g	—	—
II	58	P14 洞渓	II層	鉄器	一部欠損	—	—	長さ 94.2mm 幅 34.5mm 厚さ 19.5mm 重さ 31.1g	鉄で覆われている	—

第2表 集石観察表

№	石材	塊存状況	面 (cm)	横 (cm)	高 (cm)	重量 (g)	備考
1	砂岩	完形	58.0	30.0	30.0	80000 以上	
2	砂岩	完形	31.0	24.0	16.0	15000	
3	砂岩	完形	30.0	19.0	16.0	7150	
4	砂岩	完形	38.0	22.0	15.0	13000	
5	砂岩	完形	43.0	32.0	20.0	33000	
6	砂岩	欠損	23.0	14.0	8.0	2310	
7	西質ホルンフェルス	完形	27.0	11.0	6.5	2180	
8	北質ホルンフェルス	欠損	23.0	12.5	6.0	3190	
9	砂岩	欠損	25.0	12.0	6.0	1450	
10	砂岩	欠損	19.0	12.0	6.0	2250	
11	粗面泥岩	欠損	19.0	8.0	7.0	1850	
12	細面泥岩	欠損	14.0	11.0	8.0	1430	
13	砂岩	欠損	16.0	8.0	8.0	1110	
14	砂岩	欠損	16.0	10.5	12.0	2110	石墨化
15	砂岩	欠損	21.0	11.0	7.5	1970	
16	砂岩	欠損	20.0	12.5	7.0	1690	
17	砂岩	欠損	14.0	9.0	6.0	790	
18	砂岩	欠損	15.5	11.0	5.5	1170	
19	砂岩	完形	13.0	10.0	4.0	670	
20	砂岩	欠損	14.5	8.0	5.5	820	
21	砂岩	欠損	16.0	9.0	5.5	940	
22	砂岩	欠損	16.0	9.5	6.0	1010	
23	風化片岩	完形	14.0	9.5	3.0	570	
24	砂岩	欠損	14.0	9.5	6.5	880	
25	砂岩	欠損	14.0	7.0	2.5	510	
26	北質泥岩	欠損	16.0	10.0	3.0	470	
27	砂岩	完形	13.0	5.0	4.0	440	
28	砂岩	欠損	13.5	6.0	3.5	490	
29	砂岩	完形	11.0	8.0	3.0	350	
30	砂岩	欠損	11.0	8.5	5.0	390	
31	東質質砂岩	欠損	13.0	6.0	4.5	570	
32	砂岩	欠損	10.0	7.0	5.5	350	
33	砂岩	欠損	12.0	7.5	3.5	370	
34	砂岩	欠損	14.0	6.0	3.5	370	
35	かんらん石?	欠損	9.5	7.0	5.5	430	
36	砂岩	欠損	8.0	6.0	4.5	230	
37	砂岩	欠損	9.0	3.5	4.5	140	
38	砂岩	欠損	7.0	4.0	4.0	120	
39	東質質砂岩	欠損	9.0	6.5	2.5	150	
40	砂岩	欠損	9.0	6.0	4.0	230	
41	砂岩	欠損	7.0	5.5	4.0	130	
42	砂岩	完形	9.0	7.0	2.0	190	
43	砂岩	欠損	8.5	4.5	3.0	85	
44	砂岩	欠損	8.0	6.5	4.0	240	
45	砂岩	欠損	9.5	6.0	2.0	230	打削石斧標
46	砂岩	欠損	8.0	6.0	4.0	270	
47	砂岩	完形	18.0	15.0	6.0	1730	
48	砂岩	完形	11.0	9.0	4.5	670	
49	砂岩	完形	10.0	9.0	7.0	720	

№	石材	塊存状況	面 (cm)	横 (cm)	高 (cm)	重量 (g)	備考
50	砂岩	欠損	14.0	7.0	4.5	670	解石質砂岩 未完成
51	砂岩	欠損	15.0	8.0	3.5	460	打削石斧標 未完成
52	砂岩	欠損	18.5	9.0	6.0	1170	
53	砂岩	欠損	22.5	9.5	5.5	1690	
54	砂岩	完形	15.0	11.0	6.0	1150	
55	砂岩	欠損	15.0	11.0	9.0	1775	
56	赤色片岩	欠損	19.0	14.0	1.5	710	
57	砂岩	欠損	19.0	8.5	8.0	1110	
58	砂岩	完形	13.0	10.0	4.0	640	
59	砂岩	欠損	9.0	7.5	4.0	210	
60	砂岩	欠損	13.5	10.0	3.5	540	打削石斧標
61	北質ホルンフェルス	欠損	13.0	8.0	5.5	400	
62	北質ホルンフェルス	完形	13.0	10.0	4.5	580	
63	砂岩	完形	13.0	9.0	2.5	380	
64	砂岩	欠損	11.5	6.0	6.0	350	
65	砂岩	欠損	14.5	9.0	2.5	420	
66	北質ホルンフェルス	欠損	11.5	7.0	2.0	205	
67	砂岩	完形	11.5	8.0	3.5	490	
68	砂岩	欠損	10.5	6.0	6.0	470	
69	砂岩	欠損	12.5	5.5	3.0	260	
70	砂岩	欠損	11.0	7.5	5.0	320	
71	砂岩	欠損	10.0	7.0	7.0	375	
72	砂岩	欠損	12.0	9.0	6.0	520	
73	閃開石	欠損	12.0	8.0	7.0	740	
74	砂岩	欠損	10.0	9.5	5.5	530	
75	砂岩	欠損	11.0	7.0	4.5	415	
76	砂岩	欠損	12.0	8.0	7.0	335	
77	砂岩	完形	9.0	8.5	4.5	340	
78	砂岩	欠損	9.5	5.5	3.5	240	打削石斧標
79	砂岩	欠損	12.0	6.5	4.0	400	
80	砂岩	欠損	10.0	7.5	5.0	415	
81	砂岩	欠損	13.5	8.0	3.5	560	
82	砂岩	欠損	13.5	8.0	7.0	860	
83	砂岩	欠損	38.0	24.0	17.0	18800	板灰
84	砂岩	欠損	28.0	21.0	16.0	8460	
85	砂岩	欠損	37.0	32.0	13.0	17000	
86	砂岩	完形	33.0	31.0	18.0	18000	
87	砂岩	完形	34.0	25.0	15.5	12000	
88	砂岩	完形	26.0	22.0	16.0	10000	
89	閃開石	欠損	23.0	19.0	11.0	8600	名類
90	砂岩	完形	26.0	15.0	9.5	7600	
91	砂岩	欠損	21.5	16.0	7.0	2200	石類 邪化
92	砂岩	欠損	20.0	15.0	6.5	2750	
93	砂岩	完形	35.0	26.0	2.8	35000	
94	砂岩	完形	40.0	35.0	24.0	49000	
95	砂岩	完形	27.0	21.0	13.0	11500	

写真 1



遺跡遠景（市役所から）

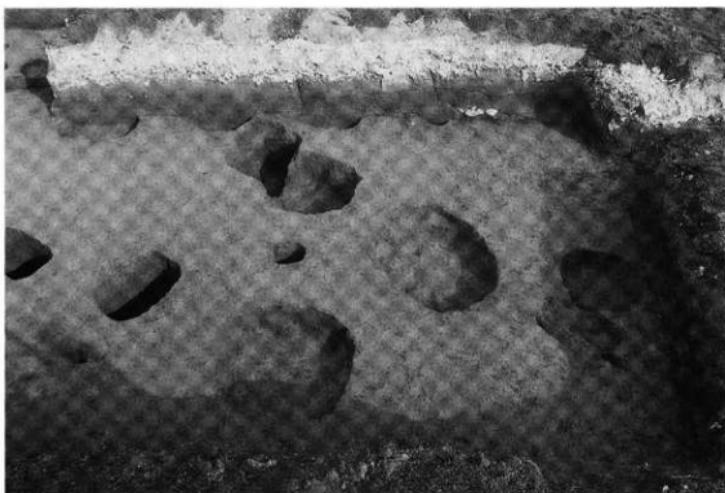


調査風景

写真2

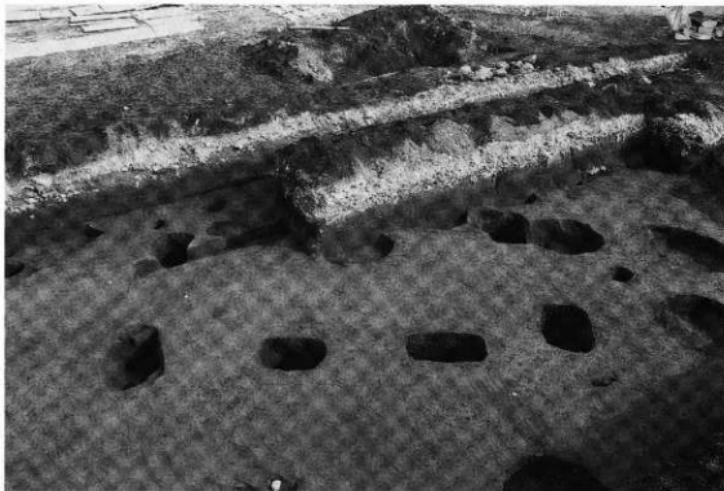


調査区近景（北西から）



遺構検出状況（南東部・南西から）

写真3



1号掘立柱建物址（西から）

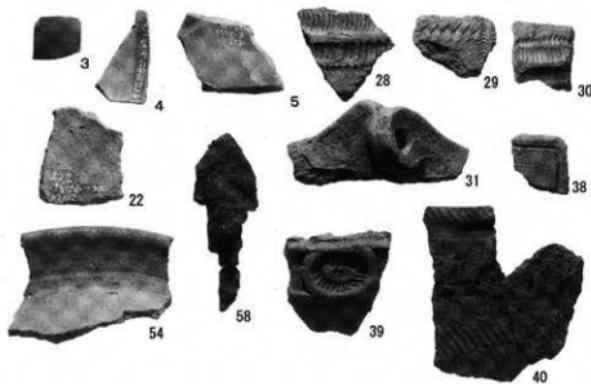


2号、3号掘立柱建物址（北東から）

写真4



集石（南西から）



出土遺物

報告書概要

フリガナ	オオママイセキⅡ
書名	大間々遺跡Ⅱ
副題	(仮称) 上野原整形外科新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	上野原市埋蔵文化財調査報告書 第3集
著者名	小西直樹、早勢加菜
発行者	上野原市教育委員会
編集機関	上野原市教育委員会
住所・電話	〒409-0192 山梨県上野原市上野原 3832 電話 0554-62-3109
印刷所	鬼灯書籍株式会社
発行日	平成19年(2007)8月31日
大間々遺跡	所在地 山梨県上野原市上野原 3785番地 地図名・位度・標高 1/25000 上野原 北緯35°37'49" 東経139°6'32" 標高 267m
概要	主な時代 奈良・平安時代 主な遺構 掘立柱建物址、土坑、ピット、集石 土な遺物 上師器、須恵器、金屬製品(鉄鎌)、縄文土器 調査期間 平成19年(2007)1月11日～1月24日

上野原市埋蔵文化財調査報告書 第3集

大間々遺跡Ⅱ

平成19年(2007)8月31日発行

編集・発行 上野原市教育委員会
